実践報告

「食物栄養科教職課程魅力アップ事業」実施

短期大学部食物栄養科教授　野尻　明敬
短期大学部食物栄養科教授　伊藤　京子

【要旨】

今回の実践は，食物栄養科の教職課程の指導内容を充実させることにより，１人でも多くの学生が，教員免許状取得・教員採用に向けてのモティベーションを高め，教員を目指すようになることをねらいとして実施した「食物栄養科教職課程魅力アップ事業」に関わるものである。年度当初からの授業での意識付けから始まり，社会福祉施設，中学校・高等学校・特別支援学校の各学校，計4か所における校外研修と，事業のまとめとしての教職講演会から構成している事業である。研修後のレポートからは，昨年度まで高校生であった学生にとって，本事業が，次年度の教育実習に向けての意識改革が図られる契機となっているとともに，各自が目指す教員像を描こうとしていることも窺える。将来的には，これらの取組が，食物栄養科の教職課程の発展に資することにもなれば幸いである。

1　はじめに

本学食物栄養科は，短期大学部の学科としては，九州で最も伝統がある栄養士養成課程である。一方，もう１つの特色は，中学校教諭二種（家庭）と栄養教諭二種の免許状取得のための教職課程が設けられており，最近では，卒業生が教壇に立ち活躍している。しかし，教員免許状取得のためには，中学校教諭二種（家庭）の場合には35単位，栄養教諭二種では14単位の教職科目等の単位修得が必要となっており，かなりの努力が求められる。実際，入学当初には教員免許状の取得を希望していても，授業のコマ数・試験の多さから，１年次前期で教員免許状取得を諦める学生も多い。４年制大学では，３年次までに教職科目等の単位を修得するのに比べると，その道程は，かなりハードであると言える。一方，教員養成について，大分県教育委員会から，１人でも多くの教員免許状取得者を期待されており[1)] 入学２年後に教壇に立つことを考慮すれば，より実践的な教員養成を行う必要がある。

令和５年４月初旬，入学式を終えたばかりの学生に，教職課程のガイダンスを実施した。４月下旬に，「食物栄養科教職課程魅力アップ事業」の準備に入り，５月には，学長裁量経費に採択され，６月～12月にかけて，計５つの各事業を実施することにより，教職課程の一層の充実を図った。研修先や講師の選定は，その内容や時期を考慮して行った（表１）。各施設・学校の責任者や講師の方々には，協力依頼に対して快諾をいただいたことが，事業実施に向けての大きな原動力となった。対象は１年生の前期教職課程履修申請者16名とし，後期の実施事業については，前期で教育実習を終えた２年生５名にも，教育実習を振り返る機会として，参加を呼びかけることにした。

表1　「食物栄養科教職課程魅力アップ事業」実施計画

	内　容	期　日	実施施設・学校等
1	社会福祉施設研修	令和5年　6月17日（土）	社会福祉法人清流共生会「清流苑」
2	特別支援学校研修	令和5年10月11日（水）	大分県立盲学校・大分県立聾学校
3	ICT教育推進校研修	令和5年10月25日（水）	大分県立大分豊府中学校
4	高等学校農業科研修	令和5年11月　1日（水）	大分県立玖珠美山高等学校
5	教職講演会	令和5年12月　6日（水）	別府大学（講師　後藤香代子氏）

２　各事業の実施

（１）社会福祉法人清流共生会「清流苑」研修

平成10年度の大学等入学者から，小中学校教諭普通免許状を取得しようとする場合には，社会福祉施設等においての研修が義務付けられている[2)]。食物栄養科では，例年，夏季休業中に社会福祉施設で５日間の研修を実施している。しかし，学生の多くは社会福祉施設について知識が乏しく，研修に戸惑うことも多い。この研修では，高齢者の社会福祉施設を見学することにより，夏季休業中の社会福祉施設での研修の事前学習の機会とするとともに，介護食の実際に触れることで，栄養士としての資質向上にも繋がるものとして企画した。①～⑤は研修の概要等である。（以下同様）

①事前学習（マナー指導も含む）

「介護等体験実習事前指導」の授業

②実施日時

令和５年６月17日（土）９時45分～ 12時10分

③講師

清流共生会本部長　　野尻和敬　氏 他

④研修内容

○社会福祉法人及び「清流苑」の説明（写真１）

○施設見学（入所者との交流等も含む）（写真２）

○給食や介護食等の説明，見学

○質疑・応答

（施設に勤務している本学卒業生も交えて）

写真１　概要説明を熱心に聴く学生

⑤学生の研修レポート（抜粋）

・様々な専門の知識を持った職員の方が，利用者の方を支えていることがよくわかり，貴重な経験となった。

・当たり前の生活ができなくなった方を介護して，再び当たり前の生活を取り戻そうとしている職員の方に感動した。

写真２　介護施設の見学

・職員の方々は清流苑の理念を大切にし，介護士以外に栄養士や生活相談の方々など，多くの方々が連携していた。

・高齢者施設に実際に入ったのは初めてで，仕事内容は想像していたが，入所者に心から寄り添っていることを実感した。

・入所者の方に100%向き合い，家族のことまで考えていて，対応がとてもきめ細やかで，その姿勢に感動した。

・介護で重要なことは，入所者が生活する上で支えになることだと理解できた。１人ひとりに対応する能力が必要だと思った。

・食事はとても大切なことだと，改めて感じた。「介護＝大変なこと」という意識から，「介護＝大変だけどとても良いもの」という考え方に変わった。

・社会福祉施設の栄養士は，入所者のことを考えて，愛情を注いで食事をつくっているのだと感じた。

・人はいずれ死を迎える日が来るけれども，食事を楽しんでもらうことを意識して働く姿を見て，優しさを感じた。

・社会福祉施設では入所者が主体であること，高齢者介護施設では，子どもと触れ合う機会が増えていることなど，教師になる上で参考になることが多かった。

・初めての社会福祉施設で，貴重な体験となった。受け入れていただき感謝している。

（2）大分県立盲学校・大分県立聾学校研修

小中学校の教諭の普通免許状を取得しようとしている学生に対しては，社会福祉施設での研修の他に，特別支援学校での研修も義務付けられている。文部科学省の指導では，社会福祉施設で５日間，特別支援学校での２日間の研修が望ましいとされている[3)]。食物栄養科では，例年後期に，別府市内の特別支援学校で２日間の研修を実施している。しかし，学生のほとんどは，特別支援学校を訪れたこともなく，知識が少ないというのが現状である。この研修では，２日間という短期間で実施される後期の特別支援学校での研修をより実効性のあるものにすることを１つ目のねらいとした。また，幅広く特別支援学校を知ることにより，様々な障がいを理解して，実際に特別支援学級を担当することも踏まえて，子どもに寄り添った指導の視点を身に付けることを２つ目のねらいとした。この２つ目の寄り添う視点や態度は，生徒指導論の授業で学ぶべき内容とも一致している。食物栄養科の学生であることから，盲学校・聾学校兼務の栄養教諭に，給食の献立の工夫や安全管理についての講義も依頼した。

①事前学習（マナー指導も含む）
「生徒指導論」の授業

②実施日時
令和５年10月11日（水）
13時15分～ 15時45分

③講師
大分県立盲学校長　永嶺ひろ子　氏
大分県立聾学校長　藤澤　一郎　氏　他

④研修内容
○教育施設・教育内容の概要説明
○施設見学　２班に分かれて盲学校，聾学校の両方を見学（授業も含む）（写真３，４）
○質疑・応答，教員採用へのメッセージ（栄養教諭も交えて）

⑤学生の研修レポート（抜粋）
・盲学校・聾学校の皆さんは，通常の学校と同じ内容のことを学んでいることに驚いた。学ぶ方法が違うだけなのだと思った。

写真３　施設見学で施設の工夫を聴く学生

・盲学校では「言葉で伝える」，聾学校で「見せて伝える」ことを大切にしていることがよくわかった。たくさんの工夫がされていることに驚いた。
・施設が工夫されていることに驚いた。盲学校では，図書館に点字や触る絵本が置かれていたり，教室の入り口の人形に触れて教室がわかるようにしてあったりした。聾学校では，チャイムがモニターで伝えられたりして，子どもにとって，生活しやすいように配慮されていた。

写真４　点字図書を手にする学生

・災害時の対応など，悩みながら考えている姿に，先生方の責任感の強さを感じた。
・先生方が，子どもに寄り添ってコミュニケーションを図っておられ，子どもにとって安心感がある学校だと感じた。
・先生方が単に支援しているのでなく，子ど

もとともに教員として成長しているという説明が印象に残った。生徒指導論の授業で聞いていたことと同様であった。

・先生方が，教育に愛情を注いでいることがよくわかり，全ての子どもに笑顔が溢れているようで，自分も教師を目指そうと強く思うようになった。

・盲学校でのタブレットを活用した授業や，聾学校の補聴器の体験など，驚くことが多かった。通常の学級にも，支援が必要な子どもがいることを意識しておく必要がある。

・栄養教諭の先生から，給食のアレルギー配慮やチェック体制など，貴重な話を聞くことができて，とても参考になった。

・栄養教諭の先生が，食に関心を持たせたり，正しい食事量を理解させることを考えて働いている姿が印象に残った。

・校長先生のギターとメッセージが嬉しかった。多様性を意識して生活して行きたい。

（３）大分県立大分豊府中学校研修

研修参加の学生は，３年以上に及ぶいわゆるコロナ禍のなかで中学・高校での生活を過ごしてきた。コロナ禍を経て大きく変化してきたことの１つが，学校教育におけるICT（Information and Communication Technology：情報コミュニケーション技術）の活用である。以前は，授業において，ICTを積極的に使用している教員は限られていた。現在は，全教職員に一定のICTの活用が求められ，授業スタイルも大きく変化している。学生たちは，ICTやスマホの利用には慣れているものの，義務教育段階での，ICTを活用した授業については，イメージがつきにくいという意見を持っていた。この研修では，大分県教育委員会から，ICT活用の推進校に指定されている，大分県立大分豊府中学校の授業を見学することにより，教育現場の実態を体感させることをねらいとした。なお，中高一貫教育校であることから，学校づくりや施設見学など，高校教育と連携した中学校の現状について理解させることも可能となった。研修の内容は，教職概論や進路指導論の授業で学ぶ内容とも一致している。

①事前指導（マナー指導も含む）
「教職概論」の授業

②実施日時
令和５年10月25日（水）
13時20分～ 15時40分

③講師
大分県立大分豊府中学校長　安藤英俊　氏
同　　副校長　工藤　毅　氏 他

⑤研修内容
○中学校の概要と教育内容・方法の説明特に，ICTの具体的な活用状況（写真５）

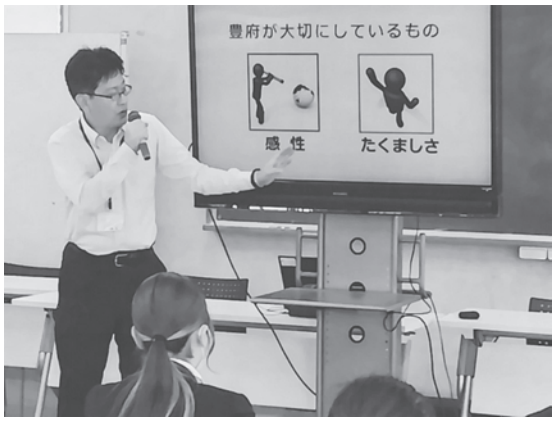

写真５　PPを利用した中学校に関する説明

○施設見学　１・２年生のICTを活用した授業見学（写真６）
３年生の文化祭準備の見学
図書館，自学室等見学

○質疑・応答

⑤学生の研修レポート（抜粋）

・副校長先生の話には，ICTを活用しての授業改善など，学校をよくして行こうとする熱意に溢れていた。

・ICTの活用により，教室での授業がわかりやすくなるだけでなく，生徒会の議案書や体育館での指導，連絡手段などにもICTを活用していて驚くことばかりだった。

・電子教科書と紙教科書を併用して授業を進めていることに驚いた。先生も生徒も，電子黒板や電子教科書に慣れていた。

写真６　ICT活用の授業を参観する学生

・単にICTを活用しているということではなく，先生方がよりよい授業をして，生徒にわからせようと工夫していた。
・ICTの活用に加え，生徒の発言の機会や生徒同士のディスカッションの場面など，楽しい授業をしていた。
・ICTを利用するデメリットを考えながら，よりよい使い方を工夫しなければならないと思った。タブレットは使い方次第で有効だと思った。家庭での使い方は，保護者にも協力してもらう必要がある。
・英語の授業では先生はほぼ英語で授業を進めたり，社会科の授業ではタブレットで資料を提示したり，これからの社会生活でも必要なことだと思った。
・先生が発問して答えが出ないと，先生がすぐに答えずに，生徒をサポートして，生徒の答えを促そうとしていた。
・生徒は自主性があり，コーラスの練習では，生徒同士が教えあったり，励ましあったり，お互いを高めあうような成長の場をたくさん見ることができた。
・生徒が，自分たちで考え自分たちで行動することができるのですごいと思った。生徒が成長するチャンスがたくさんある学校だと思った。
・中高一貫教育校ということで，行事が合同で行われていたり，高校生サポーターの制度があったり，生徒同士で高めあう学校だと感じた。
・中高一貫教育校で学校が大きく，校長先生が広い校長室に招いてお話をして下さった。教員を目指そうという気持ちが強くなった。

写真７　校長の激励を受ける学生

（４）大分県立玖珠美山高等学校研修

研修に参加している学生は，出身校の学科別では，普通科，総合学科，商業科，調理科などであり，農業科で学んだ学生はいない。しかし，この10年ほどでは，久住高原農業高等学校が単独校になったり，食材等に深く関わる農業科の重要性が見直されてきたりしている。農業科を設置する各校では，収穫感謝祭が行われたり，大分市で毎年開催されている，農業系の全校が参加しての即売会が大人気となることなども，報道で話題となった。中学校教諭や栄養教諭を目指す学生にとっては，農業系の高校に関する理解が不可欠であるとともに，食物栄養科の学生としても食材の生産や加工に関することを理解した上で，栄養士の資格を取得することは重要である。玖珠美山高等学校では，地域の廃材から作製したバークマットを活用しトマト生産を行うなど，SDGsを意識した農業生産や，玖珠郡唯一の高校として地域の農家や小中学校との連携を実践することにより，特色ある学校創りを推進している。進路指導論の授業にも深く関係する内容であるだけでなく，学校と地域の関わりについても知ることができる機会である。

①事前指導

「進路指導論」の授業

②実施日時

令和５年11月１日（水）

10時15分～ 12時15分

③講師

大分県立玖珠美山高等学校

教頭　塩月光久　氏

同　　農場主任　佐藤次男　氏

④研修内容

○玖珠美山高等学校の特色

地域産業科（農業科）の地域連携の取組

○施設見学　農場・ビニールハウスの生産風景

食品加工施設での安全管理（写真８）

写真８　ビニールハウスでの生産の説明

○質疑･応答（地域連携の内容も含む）（写真９）

⑤学生の研修レポート（抜粋）

・学校が広く，農場だけでなく食品加工などの地域産業科ならではの施設・設備が充実していた。安全や衛生に関する取組が徹底されていて，食物栄養科の日々の授業においても，大いに参考になった。

・JGAPやHACCPの取組などの重要性を感じることができた。栄養士としても，しっかりと理解しておかなければならない。

・地域産業科では，生産だけでなく，加工・調理，販売など多くのことを学ぶことができて，幅広い学科であると感じた。

・ジャムなどの製品は，何度も試行錯誤を繰り返して生産に結びついていることを知ることができて，生産者の苦労を実感した。

・農場での仕事や食品加工にはチームワークも必要で，販売イベントなども考えると，コミュニケーション能力も大切だと思った。

・説明をしていただいた先生が，「教えるためには，自分で一度作ってみる」と言われていた言葉が印象に残った。教育をするためには，何でも経験しておくことが重要だと思った。

・高校において，バークマットの特許をとる取り組みは，レベルが高く素晴らしいと思った。

・温室などにもICTが活用されており，農業のイメージが変わった。農業を先進的にするためにも，いろいろな勉強が大切だと思った。

・地域にねざした，おらが町の地域産業科となっていて，地元に就職する生徒も多く，地域の将来を担っている高校だと思った。

・自分の家が農業関係なので，６次産業を実感したりできて，親の努力も理解できて，充実した研修であった。先生方に感謝している。

写真９　積極的に発言する学生

（５）教職講演会の開催

短大での教員養成については，短期間での教職課程の充実が求められている。昨年度まで高校生であった学生に，次年度の教育実習に向けての指導をすることになり，学生にとっても意識改革が必要となる。そのためには，より実践的で説得力のある授業内容が必須となる。今回の講師は，長年にわたり大分県における家庭科教育の第一人者として活躍し，大分県教育委員会の指導主事時代には，大分大学において教育実習の事前指導を務めた経験があり，現在も，私立高校で家庭科主任としてICTを駆使した実践などを展開している後藤香代子氏に依頼した。（写真10，11）

①事前指導（マナー指導も含む）

「教職概論」の授業

②実施日時

令和５年12月６日（水）

13時00分～ 15時30分

※実技実習，質疑・応答も含む

③講師

元大分県教育委員会指導主事　後藤香代子 氏

④演題

「教職を目指す皆さんへ」～実践経験から～

写真10　PPを使用した講演の様子

⑤講演内容

○自身の教育実習の反省と教員としての努力

○家庭科教員，栄養教諭の役割

○授業づくりの基本と実際（実技も含めて）
　ICT機器，地域人材・事業の活用

○教師の仕事として大切なこと

○教育実習のフォーカスポイントと期待

○自身の教育理念，子どもと向き合う姿勢

写真11　意欲的に講演を聴く学生

⑥学生の研修レポート（抜粋）

・後藤先生が，ご自身の「教育実習日誌」を大切に保存して，教員人生の出発点として振り返っておられるのに驚いた。

・後藤先生が，ご自身の教育実習が不十分で後悔していることを話しておられて，教育実習の機会で，しっかりと学びたいと思った。体験談には説得力があり，教師としても，自身の様々な経験を語ることが大切だと思った。

・教師にとって授業が一番で，「いつも授業に使える材料はないかと考えてしまうことが職業病のようなものだ」と明るく言っておられた姿に感心した。日常生活にも，たくさんの教材があることを教わった。

・教員になったら，子どもと一緒に授業をつくって行きたい。楽しむ時も一緒，叱ったり指導する時も。愛情を持ってやっていきたい。

・子どもたちとの関わり方が印象に残った。子どもに寄り添い，子どもの話を聞いたり，表情を観察したりして，子どもの変化を見逃さないないように心がけて行くことがとても大切であることがわかった。

・子どもに寄り添うという教育理念を持っておられたことが印象に残った。自分もしっかりとした専門知識と教育理念を持てるように頑張りたい。

・自分が家庭科教師になろうと思っているのに，何を学んでほしいかを考えたことがなかった。自分の生活や周囲の人々の生活に興味を持ち，生活を振り返ることが大切で，子どもたちにも考えてもらうことが重要だと思った。

・今回の講演は，栄養士としてもとても活かせる内容だった。これをきっかけに，イベントやボランティアなどにも積極的に参加してみたいと思うようになった。日頃から視野を広げて，誰にでも優しく接する人になりたい。

・「共育」という言葉が心に残った。教師と生徒とのつながりがある中で，よい授業が生まれると思った。子どもとともに学び成長し，子どもたち同士が学びあう状況をつくることが重要だと思った。

・６月からの社会福祉施設での研修から始まり，学校訪問など多くの研修があったが，全て休まずに積極的に参加して，とても勉強になった。来年５月からの教育実習で頑張ろうとする気持ちが湧いてきた。

３　総括と今後の展望

ここまで，「食物栄養科教職課程魅力アップ事業」について，時系列で研修報告をした。当初，前期教職課程履修申請者の16名を事業対象者としたが，後期終了時点で13名となった。しかし，昨年度までと比較すると，13名もの学生が中学校家庭科教諭や栄養教諭の免許状取得を目指していることは，喜ばしいことである。これは，食物栄養科１年の在籍者の，３分の１にあたる。

この事業実施にあたり心がけたことは，次年度の教育実習・教員免許状取得に向け，より実践的な事業にすることである。各研修は，「介護等体験実習」・「教職概論」・「生徒指導論」・「進路指導論」・「教育実習事前指導」の授業と密接に関連する内容となり，事業後の学生レポートからも，その意義は感じられた。各施設・学校での研修は，大学での座学では経験できない内容であり，学生にとっては，いわゆる現場経験の貴重な機会になった様子である。また，まとめの教職講演会は，講師からの多様な経験を踏まえた講演により，次年度の教育実習に向けての気運醸成に繋がったと考えている。

本事業を実施して，教職課程の指導者として再認識したことがある。それは，山本五十六の名言「やってみせ，言って聞かせて，させてみせ，ほめてやらねば，人は動かじ」という，いわば人材育成のヒントである。各事業では，説明・講義，見学・体験だけでなく，質疑・応答の時間を十分にとった。次々と質問が出る様子には，指導者として喜びが溢れて来た。そして，ほぼ全員が一度，お礼の言葉を述べる機会を設けたが，緊張しながらも，立派に役割を果たそうとする姿に感動さえ覚えた。半年で逞しく成長した姿には，「やらせてみるものだ」と感じさせてくれた。正に，何事も経験することに尽きる。本事業で成長した学生が，次年度の教育実習で逞しく更に成長し，１人でも多くの学生が教員を志望し，教壇に立つことを期待している。そして将来，別府大学短期大学部食物栄養科で学んだことを誇りとして，教育界のリーダーとして活躍することを，心から願っている。

４　謝辞

事業実施にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。本研究は，別府大学・別府大学短期大学部学長裁量経費の助成を受けたものです。

＜参考文献＞

１）「大分県公立学校教職員の人材育成方針」
令和５年３月改定　大分県教育委員会
https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2182176.pdf

２）「よくわかる社会福祉施設」
2020年４月第５版　全国社会福祉協議会

３）「介護等体験ガイドブック新フィリア」
2022年３月第２版　全国特別支援学校長会
全国特別支援教育推進連盟